

平成 24 年度「みえの現場・すごいやんかトーク」（四日市市）の概要

1月20日（日）に四日市市の県四日市庁舎で「みえの現場・すごいやんかトーク」を開催しました。

当日は、東日本大震災の支援活動に取り組まれている6名の方にお集まりいただき、活動内容、震災後1年10ヶ月を経ての活動等の変化、今後の活動、行政へ期待していることなどについて、ご意見等をお伺いしました。



【参加者からの発言】

当日は、参加者の皆さんから、以下のようなご意見をいただきました。

- 復興には、人にとっての復興、地域にとっての復興の両面があるが、ボランティアとしてかかわるのは、人の復興面であり、誰一人として同じ支援は当てはまらない。初期は食事、住む場所、着るものなど誰もが納得できる支援だったものが、時間が経ち支援活動が個人のニーズに応じて細分化されてきているのが現状である。
- 23年6月に野球道具を贈って以降、合計4回ほど物品を被災地に贈っている。最初は、野球道具を贈っていたが、最近は、三重県とつながっていることを感じたいので自分の会社のマークの入ったユニフォームが欲しいとの要望もあり、子どもた

ちの小学校の名前にして練習用のシャツを贈ったりしている。顔が見えなくても心がつながっている感じだ。

- 初期の頃の型にはまった支援と違い、オーダーメイド型の支援に変化してきている。支援は、ワン ウェイで一方がしてあげる側になっているので良くないだろうと考えている。そのため、支援としては、今年までと考えている。今後は、「お互い様」という言葉を前面に出して、一緒に何かしようよということで活動していきたい。
- 被災地に三重から来たと言うと相手の表情がパツと変わる。これは、今まで様々な方が支援をコツコツと積み上げてきたからだ。三重だからこそ頼めるというものを民間ベースで進んで形づくっていきたい。
- 当初は、避難者の相談窓口が無く、毎日 30 件から 40 件の相談があった。そのなかで手探りで進めていた。心がけたことは、相談者の声に忠実かつフェアに聞くこと。
変化としては、被災地から他府県に避難した方が自立され、今度は支援する立場に変わってきた。
- 心身をリフレッシュするため保養として国内のみならず、海外 20 カ国の受入先があり、東南アジアのバリ島が一番人気である。
- 「h a h a k o」には、福島県内に残っている人から小さい子供に食べさせる安心の野菜を送って欲しいとの相談や部活動の遠征や練習試合の受入が出来ないかとの相談がある。
- 三重県に避難された方からは、三重県は住みやすい、ご近所も親切との声も多い。また、他県が県営住宅での受け入れを中止するなか、三重県は引き続き新規の方もしばらくは入居を受け入れてくれており、皆さんは感謝している。
- パートとして被災者を鈴鹿と四日市で計 2 名を受け入れているが、当初は、他の従業員となじめなかったが、今では三重弁で話すなど打ち解けてきたのが嬉しい。
- 平成 23 年 4 月 28 日出発の「みえ発！ボラパック」第一便にリーダーとして参加した。女性ボランティアが少なかったこともあり、女性の声を聞いて欲しいという要望が多かった。
山田町のボランティアセンターでの経験では、社協、行政の連携により被災者の支援にいかに迅速に応えるかが課題だと感じた。

Q 今後の皆さんのアクションやそれに対して行政がどういうサポートをしていけばいいのかを聞かせてほしい。

- 現在でも支援活動をしていることを忘れて欲しくない。また、三重県の人にも知ってもらいたい。そのためには、東日本大震災の支援事業を県がちゃんとやっていることを言って欲しい。でないと県民も知らないし、市町も知らない。支援は細分化するので県ができないことはあってもいい。
- 野球を通じて被災地の支援をしている。自分が教えている小学校 2 年、3 年生の子どもたちからも支援してもらっている。少年のスポーツ人口を増やしていくためにもプロ野球が開催できる施設を整備して欲しい。
- 支援は、一方的であるので、今後は、支援活動というよりも、人、モノ、情報などの交流事業を展開していく必要がある。スポーツ、郷土芸能、文化系、スポーツ合

宿などの交流事業に対し、行ったり来たりすることが出来ればいい。そういう交流事業に三重県が支援いただきたい。

イベントにおいて被災地でこんなモノが作れるようになりましたと販売するなど被災地のモノの販売促進の場としてのイベントの参加についても、行政にご協力いただければと思う。

- （神社が被害にあったところなどは）鳥居をくださいなど特殊な要望、また伊勢神宮もある三重県だからこその要望もある。
- 防災面では、市町を越えた避難、連携について県がコーディネートして欲しい。
- 個人の不安を少しでも軽くしていきたい。（被災地で生活されている）被災者がリフレッシュするための保養プログラム、例えばキャンプ場で長期休暇を利用した長期合宿、林間学校などで滞在し、リフレッシュしたいというニーズが高い。三重県内には、多くのキャンプ場があり、行政によりキャンプ場を無料で使わせていただくと三重県内でたくさんの保養プログラムができる。何とか今年の夏休みに向けて具体化していくことに支援をお願いしたい。
- 就労支援などこれぐらいの支援なら自分たちも出来るかもということをもう少しアピールしていかなければと思う。社宅も築 40 年とリフォーム等も必要な状況であり、資金的な余裕があつての提供ではないので、もう少し実情がうまく伝わってこれくらいなら出来るだろうということを皆さんに伝えていきたい。
- ボランティアについても個人の負担による参加であり、お金がかかる。参加することに支援があれば有り難い。

【知事の発言】

皆さんからのご意見を受け、知事からは次のような発言がありました。

- 平成 33 年の国体開催までには、球場の新設か改修によりプロ野球が開催できるようにする。
- 市町を越えた避難については、県と市町の広域防災協定の実施細目を作っていて、地域ごとにできるように実施していきたい。
- （キャンプ場を使用した保養プログラムの件については）全部は無理ですが、いくつか受け入れが出来ればと思う。
- 細分化してきている支援やワンウェイでは駄目で、交流事業に対して支援していく。交流事業への支援については、財政的支援か後援していくか中身は色々と考えられる。交流事業の支援については、画一的ではなく、皆さんの活動の多様性を活かす交流事業をサポートできる仕組みを来年度予算に向けて考えていきたい。
- 今後も定期的にトークを開催させていただきたい。



【東日本大震災の支援活動に取り組む皆さん】

東日本大震災の被災地での支援活動や被災地との交流、産業復興支援、避難者の支援などに取り組まれている 6 団体の代表・個人の方にお集まりいただきました。